

ガダマー解釈学における書記性と

口頭性の間の連続性という問題

——歴史的伝承の場合と詩作的・文学的テキストの場合の比較考察——

川 村 壮 平

はじめに

H・G・ガダマー(1900-2002)は、主著である『真理と方法』(1960)の第三部において、言語を「そのうちで理解そのものが遂行される普遍的媒体」(*das universale Medium*)として見定めている(GW1, 392)。このような媒体として言語を考えると、そこには「書記性(Schriftlichkeit)」と「口頭性(Mündlichkeit)」という二つの構成契機が見出され、この両者の間の連続性をガダマーが重視しているという点については、これまでも再三指摘がなされてきた^①。このような連続性を重視する見方それ自体については、ガダマーは後年に至るまで変わることなく堅持している。しかし、なお立ち入った考察を試みると、われわれは、ガダマーがこの連続性という点に関して、すべてのテキストを同列に論じ

ているわけではないということに気づく。とりわけ1980年代以降の論稿の随所で言及されるのであるが、ガダマーにとっては或る「卓越したテキスト(*der eminente Text*)」が存在するのである。それは、詩作(*Dichtung*)すなわち文学的芸術作品のテキストである。本稿は、この書記性と口頭性の間の連続性に関して詩作的・文学的テキストが有する独自性を、『真理と方法』において主題的な考察対象とされている言語的伝承一般、すなわち歴史的伝承としてのテキストの場合と対照することで、際立たせることに従事する。ガダマーのいわゆる詩的言語論はこれまで芸術論の文脈に位置づけられることが多く、『真理と方法』以降を含めた彼の解釈学の全体に対して芸術思想が持つ包括的意義を証立てるものとして取り上げられることが多かった^②。それに対して本稿は、詩的言語が問題になると、理解の遂行を担う媒体としての

言語内部の連関にどのような変容がもたらされることになるかを跡づけるという点で、これまであまり議論がなされてこなかった試みであると言える。

本稿はまず、歴史的伝承としてのテキストの理解・解釈に關して、書記性と口頭性の間の連続性が何を意味するかを概観する(第1章)。そこでは、理解のプロセスの全体は口頭性によって特徴づけられ、書記性はいわば段階的契機として明らかになる。続いて、これとの対照において詩作的・文学的テキストの場合を取り上げ、その独自性に着目しながら、書記性と口頭性の間の連続性の内実に關して、どのような変容がもたらされるのかを検討する(第2章)。そこではむしろ書記性のほうに優位が置かれることになる。

1. 歴史的伝承の理解における書記性と口頭性の間の連続性

書記性と口頭性の間の連続性を強調するガダマーのような立場は、西洋哲学の伝統においてひとつの特異点を形成していると言える。このことには、彼が歴史的伝承の理解・解釈に際して「テキストとの対話」——これは「問いと答えの弁証法」という論理構造を持つものとして概念化される——を不可欠の契機として見てとっていることが関係している³⁾。テキストを解釈することが成し遂げるのは、「テキストとの対話に至る」こと(In-das-Gesprächkommen mit dem Text)なのである(GW1, 374.)。しかし、ガダマーは何も、我と汝という二人の人間の間に成立しているような対話が、そのままテキストとその解釈者の間にも成立していると考えているわけ

ではない。テキストは、それが文字で書かれたものである以上、口頭での語りに比して異他的であり、ある種の疎外状態のうちにあるから、我に對する汝のように存在しているのではないことは明らかである。すなわち、テキストのほうに直接語りかけてくることはないのであって、われわれのほうにむしろテキストを「語ることへともたらす」(Zum-Reden-Bringen)必要があるとガダマーは指摘している(Vgl. GW1, 383.)。しかし、彼はこの「語ることへともたらす」ということに關して、われわれ解釈者が任意に行えることであるとは考えない。ガダマーにとつて、テキストが現在のわれわれのところまで伝承されてきて、まさに理解・解釈されるべき対象になっているということは、次のような事態を意味するのである。すなわち、その際には、「伝承としてわれわれのところにやって来た言葉、われわれが耳を傾けなければならない言葉が、あたかもわれわれに對して語りかけ、われわれ自身のことを意図しているかのように、実際にわれわれを射当てている」(GW1, 405f.)のである。それゆえ、テキストを「語ることへともたらす」ことが可能になるのは、このわれわれを射当てて伝承の言葉に對する応答を措いて他にはないということになる。

伝承としてわれわれのところにやって来た言葉がわれわれを射当てるとはどういうことであろうか⁴⁾。このことを問題にするうえで重要であるのが、ガダマーは、「テキストそれ自体」と「テキストの解釈」を区別して考えるようなある種の二元論を退けているということである。テキストは、わ

れわれのところ、に伝承されてくるに当たって、その過程でさまざまな解釈にさらされてきた。そして、そのような解釈までもがテキストと一緒に時代から時代へと伝承されてきている。それゆえ、われわれが「テキストそれ自体」のようなものに直接対峙しているとしたら、どの素朴に信じていたとしても、このような伝承の歴史すなわち伝統の働きが当該テキストに対するわれわれの見方をともに形成してしまっているのである。伝統の働きがあるからこそ、そのテキストはまさに理解・解釈されるに値する対象としてわれわれの目の前に現れてきているわけである。ガダマーが「テキストとの対話」と言うときの「テキスト」は、書記性において存在している対象であるだけでなく、その解釈の歴史であるところの伝統の働きをもそのうちに含み込む仕方と考えられている。それゆえ、テキストは、それが生身の人間の声のように直接語りかけてくることはなくとも、伝承として「われわれを射当てる」ないし「われわれに対して語りかけてくる」ような言葉でありうるのであって、それにわれわれが応答すること、で対話がなされるとガダマーは考えるわけである。

以上の議論から、テキストとの対話が問題になる場合、その主導権はむしろテキストのほうにあることが明らかとなった。われわれ解釈者がテキストを「語る」ともたらすとき、それ以前にわれわれは伝承の言葉に「捉えられている」のである (Vgl. GW1, 379)。このようなテキストとの対話に見られるある種の受動性は、ガダマーが理解そのものに関して強調するような「出来事 (Geschehen)」としての性格に對

応するものである。この出来事的性格を踏まえてガダマーの考える理解のプロセス全体を視野に収めるとき、テキストとの対話という問題圏にまた違った光が当てられることになる。ガダマーは、次のような仕方、視点を対象＝テキストの側に移したうえで、理解のプロセスの大局を記述している。

〈対象〉の側から見れば、この出来事が意味するのは、伝承の内容が、そのその都度新たな意味および共鳴の諸可能性 (Sinn- und Resonanzmöglichkeiten) のうちで働き出すようになり (Inspeikommen) 、また活かし出される (Sichauspielen) ということである。この諸可能性は異なる受容者によって新たに拡張される。[……] 以前には存在していなかった何かが出現し、以後存在するようになる (GW1, 466)。

第一に着目されるべきなのは、伝承の内容がその都度新たな意味および共鳴の諸可能性のうちで活かし出されること、このように当の出来事が言い換えられているということである。さらには、この意味および共鳴の可能性は、受容者を通じて新たに拡張されると述べられている。この受容者とはわれわれ解釈者のことである。このことから、理解が出来事であるということに関して、われわれ解釈者とテキストの双方の視点から、その意味するところを記述することが可能になるであろう。それは、われわれ解釈者から見れば、テキストに語りかけられるということであり、これを端緒として理解

が始まるということである。他方で、テキストのほうから見れば、その都度異なる時代の解釈者に語りかけ、それに対して応答を得ることで、意味が新たに活かし出される場を見出すことなのである。テキストは、それが伝承されていく過程において、その都度別様な解釈者を相手にしつつ対話を展開していくのであって、このことを通じて、テキストの意味はその都度新たに規定されていくことになる。ガダマーが理解のプロセスの全体において考えているのは、このような「意味の出来事 (Sinnigeschehen)」(GW1, 476;)である。そして、この意味の出来事は、テキストがその解釈者を見出すだけ生じうるものであり、原理的に「完結不可能な開放性 (unabschließbare Offenheit)」を持つているのである (ebd.)。

以上、歴史的伝承としてのテキストの理解・解釈に関して、ガダマーが指摘している「テキストとの対話」の内実を概観してきた。ここで、本章の議論の出発点となった書記性と口頭性の間の連続性という問題圏に、これまでの議論がどう接続するかを改めて提示したいと思う。様々な時代のその都度の解釈者のもとでテキストの意味を新たに活かし出していくような「意味の出来事」の原理的に完結不可能な過程が、対話の次元として描き出されることになる以上、歴史的伝承の場合、理解のプロセスを全体として特徴づけているのは口頭性のほうであると言える。それに対して、書記性は、あくまでテキストとその解釈者の出遭いの局面を構成する段階的契機にすぎないということになる。解釈者 (Interpret) が「間に入って語る者 (inter-pres; der Dazwischenehende)」である

のと同様に、書記性において存在しているものとしてのテキストは「意味の領域 (Sinnshäre)」を媒介する役割に徹するものなのである (vgl. GW1, 394, GW2, 350.)。ガダマーがヘーゲルの名言い回しを用いて表現するように、書記性は「疎外された語り (entfremdete Rede)」(GW1, 397;)であり、「精神の純粋な痕跡」なうし「意味の死せる痕跡 (tote Simspur)」である (GW1, 169.)。理解・解釈が実際に遂行されると、このような疎外状態からの自己回復がなされ、書記性は口頭性へと移行し、それによってテキストは「それ自体としては消失してしまふ」とガダマーは考える (GW2, 351.)。このような事態を踏まえて、後年のガダマーは、「(テキスト)はいまや「文献研究の対象領域を表す名称以上のもの」であり、「最終的産物 (Endprodukt)」と見なされてはならないと主張する (GW2, 337, 341.)。それは、「「解釈学的概念」として、「了解の出来事 (Verständigungsgeschehen)」におけるひとつの段階」「中間的産物 (Zwischenprodukt)」という位置づけを与えられることになる (GW2, 341, 345.)。このようなテキスト概念は、歴史的伝承の理解における書記性の位置づけ、およびその口頭性との関係性の内実を象徴的に映し出すものであると言える。

以上が、歴史的伝承の理解における書記性と口頭性の間の連続性という問題圏に関するガダマーの議論の概要である。それはいわば、書記性を段階的契機としながらも全体として口頭性によって特徴づけられるような「意味の出来事」の過程であった。最後に、本章の議論を端的に表す記述であると

筆者が考えるものを二つ提示したい。ひとつはガダマー自身によるもの、もうひとつはガダマー最晩年の弟子D. デイ・チエーザレによるものである。

口頭性と書記性の間にはいかなる鋭い分離も存しない。両方のあり方において伝承は遂行されうる。〔……〕新たな口頭性こそは、伝承がそのうちではじめて完成されるものである (GW7, 261f.)。

テキストは、ガダマー解釈学にとっては、声の循環的な連続性を中断する中間的なもの (das Zwischen) である。その声は、私の声である以前にも、いつもすでに他なるものの声であったのである (Di Cesare 2011, 163; Vgl. Di Cesare 2006, 337f.)。

2. 詩作的・文学的テキストの独自性

詩作 (Dichtung) のうちで生じているのは、まさにコミュニケーションの特別なあり方である。〔……〕解釈学的なプロセスの基礎を成している、ディアローグ的なものの根本形式に対応するような問いと答えの弁証法は、ここで或る特別な修正を獲得する。詩作を受容し、解釈することは、或る固有のあり方をしたディアローグ的關係を暗示しているように思われる (GW2, 508.)。

これは、ガダマーが自己描写を試みた文章からの引用であ

る。この記述に関して、何よりも着目されるべきなのは、詩作において、問いと答えの弁証法が「或る特別な修正を獲得する」と述べられている点である。この「問いと答えの弁証法」は、前章で論じた「テキストとの対話」というあり方において見出された口頭性の論理構造をなすものであった^⑤。それゆえ、ここでは、詩作の受容および解釈がなされるとき、前章で確認したような理解のプロセス全体を特徴づける口頭性、ないし書記性から口頭性への移行に関して、何らかの特別な修正がなされるとする見解が表明されていることになる。本章は、この特別な修正が何であるのか、その内実を明らかにすることに従事する。さしあたり、考察の端緒として役立つと考えられるのは、ガダマーが、文学的テキストの理解・解釈が問題になる場合、「テキストは消失するのではなく、あらゆる理解に対して規範的要求を掲げて現に立っている (dastehen)」と述べていることである (GW2, 351.) (90)。前章で確認したように、歴史的伝承の場合は、書記性から口頭性への移行がなされることで、「テキストはそれ自体としては消失してしまう」とされていた。ガダマーは、詩作的・文学的テキストに関して、全く逆のことを主張しているのである。ここで、テキストは消失するどころか「現に立っている」と言われている。われわれは、詩作ないし文学においてテキストとの対話がこうむる修正について跡づけるために、まずはこの「立つ (stehen)」という存在様態から出発しなければならない。

2・1. 言い述べる言葉―言表―自己充実

前述した箇所以外にも、ガダマーはこの「立つ」という語を好んで用いている。それは、「立つている言葉」という意味におけるテキスト」(GW8, 41)、「『書かれてゐること』で立つてゐる (geschrieben stehen)」ひとつの言葉」(GW8, 73. Vgl. GW8, 38, 262.) 等のように、「とりわけ「言葉 (Wort)」と結びつけて語られることが多い」。それゆえ、詩作的・文学的テキストをより立ち入った仕方で規定するためには、「言葉」の問題圏に多少なりとも言及することが有効であると考えられる。事実、論文「言葉の真理について」(1993)においてガダマーは、言葉への問いを問うことと詩作的・文学的テキストをめぐる考究の不可分性を主張している。

ガダマーは、「言葉である (Wort sein)」ということとは、「言い述べて存在する (sagend sein)」ことである」(GW8, 40.) と端的に述べている。そして、この言葉が言い述べて存在すること (Sagendsein) を「言表 (Aussage)」と呼んでいる (GW8, 41. Vgl. GW8, 74f.)。言表と言ったからといって、ガダマーは、いわゆる命題論理 (Aussagelogik) における場合や尋問を受けた際に調書にとられる場合に認められるような言明・命題に範をとるべきであると主張しているわけでは決してない (Vgl. GW1, 472.)。ガダマーがここで活かし出そうとしているのは、それらが持つ撤回不可能なあり方、それそのもののうちで言い述べられることのみが妥当とせられているというあり方なのである (GW8, 41.)。われわれは、さしあたり、詩作的・文学的テキストが持つ自律的性格に注意を向ける必

要がある (GW8, 47.)。

しかし、これは未だ消極的な限界づけであるにすぎない (ebd.)。つまり、「言い述べて存在すること (Sagendsein)」というもう一つの規定との連関について検討されなければならない。ガダマーは、「(aus)」という前づきは、完全無欠性 (Vollständigkeit) への権利の主張を表現している。言表は事態がどうであるかについて完全な仕方で言い述べる」(GW8, 74.) としている。また、「詩作的な言葉は、この言 (Sage) がみずから自身を証言し (bezeugen)、みずからが検証して許容するもの以外のいかなるものも証言しないという意味において言表なのである」(GW8, 75.) とも述べている。さらに、これらとの関連において、「語る」(Sprechen) の一般的働きであるあらわにすること (Offenbarmachen; ἀποδύν) の最高の実現こそが、詩作的な言語を際立たせる」(GW8, 76.) という重要な記述も見出される⁸⁾。ここで、われわれはまず、「言い述べる」「証言する」「あらわにする」ということに共通する動性そのものに着目しなければならない。ガダマーは、事実、テキストがその書記性にもかかわらず何らかの音声的なあり方へとそれ自身から立ち上がったような動性を考えているのである (…①)。彼は、このような事態を指して、「言葉の自己現前 (化) (Selbstpräsenz, Selbstpräsentation)」「言語の自己現出 (Selbsterscheinung)」「言葉が出来しつてくる」(Hervorkommen)」などと表現している (GW2, 352f. GW8, 46, 246f. 253.)。他方で、このような動性があるならば、それを通じて言い述べられ、証言され、あ

らわにされるものが問題にされなければならない。ガダマーは「みずから自身を証言する」という言い方をしているが、やや先取的に補うならば、テキストにおける言い述べられるべき事柄、すなわち「テキストの意味 (Sinn)」があらわになること (…②) が考えられていると見てよいであろう。以上を総合するならば、テキストはみずから音声的なあり方へと現前、現出、出来してくるのであるが、そのことを通じてその意味をあらわにするということになる。そしてより一層重要なのは、これに関して、完全無欠な仕方でなされるような最高の実現が考えられているということである (…③)。

これまでの議論を踏まえるならば、言表概念の全容を、より積極的な仕方で捉え直すことができるであろう。言表は、その意味するところに関して文字通り「完全に言い述べる言 (Aussage)」なのである。それは、別様ないかなる審級への指示も行うことなしに、それ自身において、「言い述べることをその真なる終極に至るまで導いていく」という意味において自律しているのである (GW8, 42. Vgl. GW8, 76)。ガダマーは、詩作的・文学的テキストに象徴的なこのような事態に関して、言語の「自己充実 (Selbsterfüllung)」という術語を当てて表現している (GW8, 75ff. Vgl. GW8, 42, 55ff.)。しかし、われわれは未だある種の形式的な規定のもとに留まっている。そこで、前述した①-③の構成契機に留意しつつ、自己充実ということでガダマーが意図しているものについて、一層立ち入って検討する必要がある。

2・2. 自己充実の具体相

目下手がかりを与えてくれるのは、詩作的・文学的テキストに関してガダマーが見てとっている「意味 (Sinn) と響き (Klang) の統一 (Einheit)」(GW8, 253, 291.) という特徴である。この他にも両者の「対応関係 (Entsprechung)」(提携 (Zusammengehen))、「バランス」といった表現も見出される (GW8, 52, 291.)。いずれにしても、彼は意味と響きという両項とそれらの間の緊密な関係性に着目するのである⁽⁹⁾。次のような記述がある。

言葉は、文学的テキストにおいてはじめてその完全な自己現前 (Selbstpräsenz) を獲得する。言葉は、言い述べられる事柄 (Gesagtes) を現前させるのみならず、みずから自身をもその現出してくる響きの現実のうちで (in seiner erscheinenden Klangwirklichkeit) 現前させるのである。[……] 言葉および語りが有する響きの現実も、意味の伝達と分かち難く結びついている。[……] 文学的テキストにおいては、いかなる言葉もその響きの現実のうちに自己現出 (Selbsterscheinung) するということが [……]、¹⁰ 当の言葉によって言え述べられる事柄のためにも重要性を持つのである (GW2, 352f.)。

ここでまず目を引くのは、言葉の機能が、それが言い述べられる事柄を現前させることや意味を伝達することに解消されるものではないとされていて、他ならぬ言葉の自己現前・現出

(①)の契機」が指摘されていることである。そして、この言葉の現前・現出に深く関わる要素として挙げられているのが「響きの現実」である。この「響き」について、ガダマーは「韻律と韻という形態の両極からなる響きの領域(Klangbereich)」(GW8, 52)などという言い方はしているものの、それが具体的にどのようなものであるかについては詳述していない。ガダマーの念頭にあるのは、恐らく18歳の彼に「感電させるかのように作用した」S. ゲオルゲの詩の音楽性と、そのゲオルゲが自らの手本とし、ガダマーも随所で言及するS. マラルメの「純粹詩(*poésie pure*)」と「理想であらう」(GW9, 217ff. Vgl. Pl, 212)。いずれにしても重要なのは、この響きの現実のうちに言葉が書記性から音声的に立ち上がってくるものが、ガダマーが考えているということである。詩作的・文学的テキストにおける意味と響きの統一ないし対応関係は、自己充実において①、②の契機が不可分であることを、端的に言い換える仕方で示している。

さらにガダマーは、この意味と響きの間の密接な関係性を、詩作的・文学的テキスト全体の統一性・自律性の問題とも関連させて論じている。それは、〈テキスト〉という語の本来の意味を引き合いに出すことでなされる。

〈テキスト〉という語が、本来は、諸々の糸がひとつの織物へと織り込まれていることを意味し、その織物はみ

ずから自身をばらばらにならないように纏めていて、糸の一本一本が決して目立ってこないようにさせているのと同じように、詩作的なテキストもまた、その諸契機が言葉と響きの統一的な連なりへと適合してしまっているという意味において、〈テキスト〉なのである。語りの意味(Redesign)の統一がこの統一を構成しているだけではない。そうでありながら(im selben Atem)、響きの形象の統一もそれを構成しているのである。詩作的なテキストは、「……」流れ去っていく語りの奔流(Strom dahinfliegender Reden)から浮かび上がってくる全体のようなのである(GW8, 289f.)。

着目されるべきなのは、詩作的なテキストがひとつの織物に比せられるような統一性を備えていて、この統一が意味だけではなく響きによっても構成されているという主張である。それどころか、ガダマーは明らかに響きの関与にこの統一性の所以を帰している。そして、このような統一性に伴って、テキストはひとつの全体として浮かび上がってくると考えられている。ガダマーは、この全体について「意味の鳴り響く全体(das klingende Ganze des Sinnes)」という言い方をしてもいる(GW7, 267)。ここで見えてくることができるのが、自己充実の③の契機、完全無欠な仕方であらわにすることとの対応である。意味だけではなく響きが関与することで、詩作的・文学的テキストは解消しがたい統一へと接合され、鳴り響く仕方の意味の全体を完全に浮かび上がらせるのである。

意味と響きの統一ないし対応関係という問題圏を跡づけたことで、ガダマーの言う自己充実の具体相を多少なりとも明らかにすることができたと思われる。

2・3. 詩作的・文学的テキストを理解・解釈するということ

さて、最後に、詩作的・文学的テキストをわれわれが理解・解釈する場面について検討したい。本章冒頭で述べたように、このことは取りも直さず、書記性から口頭性への移行という問題に関してどのような変容が見出されるか検討することを意味するのである。

ガダマーはやはり、詩作的・文学的テキストがその書記性において与えられていることからして自己充実してくるという点、その完全無欠さを重視している。このことから帰結するのが、「文学的テキストはその側で一切の反復や言語行為をあらかじめ規定している (vorschreiben)」(GW2, 352.) という事態である。それだけではなく、ガダマーは「どのように語って見たとしても、詩作的テキストが呈示する指示 (Vorschrift) を完全に実現することはできない」(ebd.) とさえ述べているし、その意味で「音声的な」言語になお先行していて、それも到達不可能な仕方で行先しているような「書記性」(GW8, 247.) を見出している。ガダマーにとってこの種のテキストが自己充実した姿は、「真なる神秘 (das wahnhafte Geheimnis)」(GW7, 267.) であって、「理念的な言語形象 (das ideale Sprachgebilde)」(GW8, 247.) なのである。

それではわれわれは、このような到達不可能な理念的なものをどう受容し、解釈したらよいのであろうか。

まず、ガダマーは、詩作的・文学的テキストの「理念的な読者 (der ideale Leser)」を想定している (GW8, 47.)。そして、この読者は聴き手でもあって、「ただ内なる耳 (das innere Ohr)」のみが聴取するようなものを聴き分ける」ことができる「理念的な聴き手」であると考えられている (ebd.)。前述したように、この種のテキストでは意味と響きが緊密な対応関係にあり、それゆえに意味の全体の現前が言葉の現前と不可分なものと位置づけられていた。したがって、ここで読者が聴き手でもあるとされているのは頷けることであって、「文学的に固定された言葉 (Das literarisch fixierte Wort)」は、「……」聴くことへとあてがわれている」(GW8, 246.) のである。そこでガダマーが持ち出しているのが「内なる耳」という審級である。これは、彼がとりわけ自身の芸術論において好んで用いる術語である⁽¹⁰⁾。ガダマーは、「ただ内なる耳のみが、形象の純粹な理念的性を聴くことを可能にする」、「ただ内なる耳においてのみ、意味連関と響きの形態とが完全に一なるものとなる」と述べる (GW8, 290.)。すなわち、「内なる耳」は、詩作的・文学的テキストの自己充実に完全に対応しうるような理念的な聴覚のあり方として導入されているのである⁽¹¹⁾。

そうすると、詩作的・文学的テキストを受容し、解釈することを試みるわれわれとしては、可能な限りこの「内なる耳」を持つような理念的な読者へと近づいていかなければならな

いということになる。しかし、この接近は具体的にどのようなものになるのか。このことを考えるうえで手がかりとなるのが、ガダマーが「留まること」(Verweilen)と呼ぶ動性である。「留まること」は、彼が「芸術の経験における真に際立った特徴」として指摘するものである(GW2, 7. Vgl. GW8, 249)。ガダマーは、芸術作品一般に関して、「いまやそれを〈知っている〉といった仕方では最終的に妥当するような答えを引き出していくことができない」という事実を指摘する(Vgl. ebd.)。このことは優れた詩に関してもまた同様であって、その詩を《もうとづくに知っている!》などと見放してしまうことはできない(GW8, 249)。むしろ、何度も反芻し暗唱することを試みるような仕方ですれと親密になっていくことが求められるのである(ebd. Vgl. GW7, 267)。「留まること」とは、その作品の「もとに留まること」(Verweilen bei...)に他ならない。このように詩作的・文学的テキストのもとに留まって、それと親密になればなるほど、それは「より一層差し迫った仕方であれわれに語りかけてくる」ようになることとガダマーは考える(ebd.)。そして、ここにテキストとわれわれの間での循環的な運動、対話の生起を見出すのである(GW2, 7. GW8, 249)。

以上を踏まえうえて、再び自己充実と「内なる耳」の問題圏に立ち帰ろう。次のような記述がある。

文学的テキストの場合は、意味と響きとの変転する諸連関を現前させる(präsent machen) どのような何かが、不断

にともに語っている。われわれが留まること(Verweilen)と呼ぶような動性の時間構造こそが、そのような現前を充足する(ausfüllen)のである。[...] 完全に耳である用意が受容する側になかったとしたら、いかなる詩作的テキストも語っていないのである(GW2, 359)。

ここでは、意味と響きの連関の現前を充足するものとして「留まること」の動性が指摘され、このことが「完全に耳である用意」ということと結びつけられて語られている。意味と響きの連関の現前は他ならぬ自己充実の動性を表すものであるから、この自己充実を解釈者・受容者の側で充足していくものとして、「留まること」およびそれと不可分な対話の循環的な運動が挙げられていると読むことができる。そして、このような循環的運動を通じてこそ、解釈者・受容者は完全に耳であるための用意を進めていくことができることとされているのである。ところで、「内なる耳」こそが、「ただそのみが完全に耳であるところのもの」である(GW8, 290)。詩作的・文学的テキストの自己充実に伴って現前する意味の全体をわれわれは汲み尽くすことができないからこそ、またそれが到達不可能な理念的言語形象であるからこそ、われわれは「内なる耳」たるべく、テキストのもとに留まる仕方では対話を続けていくのである。これが、詩作的・文学的テキストを解釈・受容する場面において生じていることの概要である。最後に本章全体を振り返りつつ、書記性と口頭性の間の連続性に関してどのような変容が生じているか結論を述べたい

と思う。本章は詩作的・文学的テクストが持つ「立つ」という存在状態から出発し、「言葉」―「言表」―「言い述べて存在すること」の連関から、「自己充実」という性格を取り出した。続いて、この自己充実を、意味と響きの統一という観点のもと、その具体相において捉え直した。最後に、詩作的・文学的テクストをわれわれが受容・解釈する場面にについて論じた。そこでは、自己充実をわれわれの側で充足していくにあたって、「留まること」という動性が指摘され、ここに対話の次元が姿を現した。これは他ならぬ口頭性の次元であるが、書記性とはどのような関係のもとに置かれているのであろうか。繰り返し述べているように、この口頭性は、テクストの自己充実における理念的なものを聴取しうるような「内なる耳」を目指すプロセスと対応するものである。つまり、自己充実はどこまでも決定的であって、口頭性においては、それにどう解釈者が参与していくかということが問題になっていると言える⁽¹²⁾。しかし、ガダマーの力点は、詩作的・文学的テクストは、それが書記性において与えられていることからして自己充実するという点に明らかに存している。それゆえにこそ、「書かれてあることで立っている」(geschrieben stehen)や「到達不可能な仕方で行先しているような書記性」という言い方がなされているわけである。つまり、書記性が口頭性のいわば圏域をあらかじめ規定してしまっているのである。ここまできると、詩作的・文学的テクストにおいて、書記性はもはや「中間的産物」すなわち「了解の出来事におけるひとつの段階」ではあり得ないことは明らかで

あるように思われる⁽¹³⁾。テクストが消失することはなく、書記性の優位性は揺らがないのである。

おわりに

本稿は、ガダマー解釈学において、言語を理解の普遍的媒体として見た場合に、書記性と口頭性の間の連続性が指摘されるという事実から出発した。そして、この連続性に関して詩作的・文学的テクストが有する独自性を、『真理と方法』において主題的な考察対象とされている歴史的伝承としてのテクストの場合と対照することで、際立たせることに従事してきた。歴史的伝承の場合には、理解のプロセスの全体は完結不可能な「意味の出来事」の過程として口頭性によって特徴づけられ、書記性は「中間的産物」としてその都度消失するものであった。それに対して、詩作的・文学的テクストの場合は、むしろ書記性が自己充実を通じて口頭性を不断に方向づけ、導くような関係にあり、その優位性が明らかにされている。いずれの場合においても、書記性と口頭性の間の連続性は確保されているが、優位性に関しては逆転しているのである。

凡例

- ・引用に際しては、その都度ページ数を併記している(略号については、文献表を参照のこと)。
- ・亀甲括弧内は筆者による補足である。

文献表

- Aristotle. (1960-1961). De interpretatione. In: *Aristotelis opera volumen I, / ex recensione Immanuelis Bekkeri, editio Academiæ Regia Borussica*. Berolini: W. De Gruyter. (中畑正志他訳『アリストテレス全集〈1〉カテゴリー論・命題論』、岩波書店 2013 年。)
- Da Via, Carlo. (2022). Language as Medium of Hermeneutic Experience. In: *Gadamer's Truth and Method: A Polyphonic Commentary*, (ed.), Cynthia R. Nielsen and Greg Lynch, London: Rowman & Littlefield, pp. 209-225.
- Di Cesare, Donatella. (2006). Die Verborgenheit der Stimme: Gadamer zwischen Platon und Derrida. In: *Internationales Jahrbuch für Hermeneutik* Band 5; Schwerpunkt: Hermeneutik der Religion, (hrsg.), Günter Figal, Tübingen: Mohr Siebeck, S. 325-345.
- , (2011). Das unendliche Gespräch. In: *Hans-Georg Gadamer: Wahrheit und Methode, 2., bearbeitete Auflage*, (hrsg.), Günter Figal, Berlin: Akademie Verlag GmbH, S. 157-176.
- Forger, Philippe. (1984). Leitfäden einer unwissenschaftlichen Debatte, In: *Text und Interpretation*, (hrsg.), Philippe Forger, München: Wilhelm Fink Verlag, S. 7-23.
- Gadamer, Hans-Georg. (1990). *Gesammelte Werke (= GW) I: Hermeneutik: Wahrheit und Methode: Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik* (1960), Tübingen: J. C. B. Mohr.
- , (1986). *Gesammelte Werke 2: Hermeneutik II: Wahrheit und Methode: Ergänzungen*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- , (1991). *Gesammelte Werke 7: Griechische Philosophie III: Plato im Dialog*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- , (1993). *Gesammelte Werke 8: Ästhetik und Poetik I: Kunst als Aussage*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- , (1993). *Gesammelte Werke 9: Ästhetik und Poetik II: Hermeneutik im Vollzug*, Tübingen: J. C. B. Mohr.
- , (1977). *Philosophische Lehre: Eine Rückschau*, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann. (=PL)
- Grondin, Jean. (1995). Das innere Ohr. In: *Denken der Individualität: Festschrift für Josef Simon zum 65. Geburtstag im August 1995*, ed. Thomas S. Hoffmann and Stefan Majetschak, De Gruyter, S. 325-334.
- Heidegger, Martin. (1997). Sein und Zeit (1927). In: *Gesamttausgabe*, Bd. 2, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann. (=GA2)
- Risser, James. (2022). The poetic word, art, and the arts, In: *The Gadamerian Mind*, (ed.), Theodore George and Gert-Jan van der Heiden, New York: Routledge, pp. 49-60.
- Schmidt Lawrence K. (1995). The ontological Valence of the Word: Introducing "On the Truth of the Word", In: *The Specter of Relativism: Truth, Dialogue and Phronesis in Philosophical Hermeneutics*, (ed.), Lawrence K. Schmidt, pp. 131-134.
- 小平健太 (2020)『ヘンズレーゲオルグ・ガダマーの芸術哲学——哲學的解釈学における言語性の問題——』、晃洋書房。
- 土方尚子・山千遙・川村壮平 (2025)「H・G・ガダマー『真理と方法』の意義とその射程」『哲学の探求』第52号、pp.81-112.
- 丸山高司 (1997)『ガダマー——地平の融合』、講談社。

謝辞

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPM-JSP2110 の支援を受けたものです。

【註】

- (1) Di Cesare (2006), S. 325-345, bes. 331-334.; Di Cesare (2011), S. 162f.; 小平 (2020), とりわけ 32-34 頁.; Davia (2022), pp. 209-225.
- (2) たとえば, Risser (2022), pp. 49-60, などが挙げられる。
- (3) 筆者は以前, 〃の「問いと答えの弁証法」の論理構造をそれに内在する先入見 (Vorurteil) の変更可能性という問題と関連づけて分析することから出発して, 書記性と口頭性の間の連続性について論じたことがある。土方・下山・川村 (2025), 102-105 頁を参照。
- (4) 〃の段落の議論については, 丸山 (1997), とりわけ 149 頁を参照。
- (5) 前章第一段落を参照。
- (6) ガダマーにおいて, 詩作と勝義の文学 (schöne Literatur) は互換性のある表現として用いられている。それゆえ, 本稿においても, 両概念を基本的には区別せずに用いることにする。
- (7) 「書かれてゐる状態で立っている (geschrieben stehen)」という M. ルターによって用いられる表現を, ガダマーは随所で好んで引き合いに出している。
- (8) λόγος と ὁ λόγος が結びつけられて語られている箇所として,

アリストテレス『命題論』17a16 を参照のこと。また, M. ハイデガーが, 『存在と時間』において指摘しているロゴスー語リ (Rede) — ὁ λόγος — あらわにする λόγος (offenbar machen) の連続についても参照のこと (GA2, 43)。

(9) ガダマーは, このような意味と響きの緊密な結びつきは, 「転移・翻訳不可能 (unübertragbar)」なものであるとしており, これが詩作的・文学的テキストに翻訳不可能性という性格を与えていると考えている (GW8, 291, usw.)。ガダマーの考えでは, 意味と響きの統一の程度の大きさの頂点をなすのが抒情詩であり, 小説は最もその程度が小さく両者の関係は意味の側へと押しやられている (GW8, 76)。

(10) この「内なる耳」という概念について, 芸術論に必ずしも限定されない側面も含めて主題的に論じたものとして, Grondin (1995) が挙げられる。また, ガダマーは自伝のなかで, マールブルク時代のフリートレンダーによる演習を回顧する際に, 「内なる耳を訓練することを学んだ」という趣旨の記述をしている (Vgl. PL, 42)。「内なる耳」という術語には, このようなガダマー自身の実体験が活かし出されているのであろう。

(11) しかし, ガダマーの「内なる耳」の用法には, ある種の揺らぎも認められる。例えば彼は, 詩を朗読するのではなく黙読するときには不可分に作用しているような契機として「内なる耳」挙げることがある (Vgl. GW2, 7, 351.)。

(12) この点に関して, L. K. シュニッツは, 「言い述べる力において存在する言葉と聴き手との間の対話」という示唆に富んだ表現をしている (Schmidt 1995, 133f.)。

(13) P. h. フォルジェは, 詩作的・文学的テキストがそれ自身

のうちにいわば音声化への動性を含んでいるという点に鑑みて、むしろ「中間的産物」という性格は、『文学的テクスト』にとって卓越した仕方である」と述べている (Forget 1984, 16)。デイ・チエーザレもまた、こうした中間的性格の延長線上に、文学的テクストを位置づけられるとする見解を表明している (Di Cesare 2006, 337)。しかし、筆者は、本稿の議論が示す通り異なる立場をとる。